Japanese Association for Religious Studies

ものを分有する積極的な言明である」。彼にとって他性とは、縮限された被造物の存在論的条件を示す表現に他ならない。したがって人間の精神による推測も、必然的に何らかの程度で他性を含んでいる。しかし、同時に推測における他性は、一性の媒介によってのみ可能となる。ここで「真理そのものを分有する」と言われるとき、こうしたいわば他性の存在論的可能条件としての一性が含意されている。また、ここで「他性を伴いつつ」と言われるとき、一性は他性の媒介によってのみ可能となることが言われている。したがって、ここで「積極的な言明」として語られる推測は、厳密な真理への到達可能性ではなく、むしろその不可能性を自らの本質として含むものである。このように、coniectura が厳密な真理への到達不可能性を前提としたうえでの積極的主張を意味するものとすれば、その含意は docta ignorantia のそれと大きな違いはないことになる。

フラッシュによれば、クザーヌスにとって否定や区別を秩序づけるものは「理性」(ratio) であり、『知ある無知』ではこのレベルで肯定神学が論じられていたため、それを超えようとする否定神学に優位性が与えられていた。それに対し『推測論』では、「対立の一致」の契機が理性を超えた「知性」(intellectus) の特質として捉えられ、そこに肯定と否定とを結びつける能力が認められている。したがって知性のレベルでは、理性のレベルにおいてこそ優位性を保持し得るとされた否定神学はその優位性を剥奪されたものと捉えている。

だが、『推測論』でクザーヌスが示しているのは、真理をめぐる肯定と否定の対立的な捉え方を超克すべきものとしての推測のあり方であり、また真理自体もそうした試みを最終的には（厳密には）拒絶するという見解であると思われる。それは、真理の到達不可能性と到達可能性の一致を知性の能力に認めようとするフラッシュの見解とは異なり、むしろ厳密な真理への到達不可能性をめぐる〈否定神学〉的思考として捉え得る立場である。

否定神学の問題は、表面的には『推測論』で論じられている多様で難解な問題群の中の一局面にしか過ぎないものである。だが、こうした問題関心からすれば、『知ある無知』に見られたクザーヌスの〈否定神学〉的思考は『推測論』を貫き、中期の代表作の一つである *De visione dei* (1453) から晩年の *De non aliud* (1462) に至るまで、ほぼ終生にわたり維持されていたと見ることができる。こうした観点は、クザーヌスの思想的一貫性をめぐる問題を、従来とはやや異なった角度から見る可能性を与えてくれるように思われる。

ルネサンスの神話解釈
――F・ベイコンの『古代人の知恵』と想像力――

下野　葉月

フランシス・ベイコン（一五六一―一六二六）による『古代人の知恵 *De Sapientia Veterum*』（一六〇九）は、神話解釈や寓意画、私標図等、寓意的表現によるコミュニケーションが豊富なルネサンス期に書かれた作品である。クピドやディオメデス、パーンやプロメテウス等総勢三十一の神々に纏わる神話とその解釈が綴られた本作品は、当時決して珍しい作品ではな

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

く、ベイコン自身本作品を執筆するにあたって、ナターレ・コンティの『神話学』やボカッチョの『神々の系譜』等ほかの神話解釈の書を参照している。

しかしベイコンは神話解釈が流行であるという理由ではなく、神話に固有の価値を認めたからこそこの著作を残した。神話には秘儀的な教えを隠し且つそれを効果的に伝えるという言語的な役割があるのと同時に、人々と神々の交流を結ぶ宗教的役割があるとベイコンは認める。宗教は比喩や寓意等の「ヴェール」や「影」を楽しむものであるため、それを奪い取ることは、もはや神々と人々の交わりを禁じるのに等しい。同時に、神話の語りはときに突飛で辻褄があわないため、その起源は非人間的あるいは神的なものではないかと想定される。そのため神話は「聖遺物」と形容され、詩や歴史的記述とも異なる神々の「ささやき」として位置づけられる。こうした性質の神話を解釈するとは一体いかなる意味をもつのだろうか。

『古代人の知恵』におさめられたプロメテウス神話に対する解釈を紐解くと、ベイコンが神話解釈を介して何をしようとしていたかが明らかになる。プロメテウスは人を土と様々な動物の粒子からつくり、人を守るために火をもたらす。しかし人間はこの創造主であるプロメテウスと火をユピテルの前で弾劾する。ユピテルはこれに喜び人に永遠の若さを授ける。一方、プロメテウスはユピテルへの捧げ物に敢えてガラクタを混ぜ、不敬をはたらいたため、コーカサス山につながれ、日々肝臓を鷹に摘まれる。ベイコンはこの物語にそれまでなされなかった独自の解釈を施す。彼によれば、この話は人が世界の中心であり、人は現状の自然や技術を批判的に捉え、更なる改善を求めるべきであると教える。神と人の交流を保つために重要だとされた神話の語りは、こうして学知と技術の発展を奨励する言説として用いられる。神話に隠された意味を読みこみ開示することによって、ベイコンは自らの理想や理念をいわば「神化」させるのである。

以上のようなベイコンの神話解釈の手法には、想像力のはたらきが意識されていると考えられる。なぜならば彼の考えによれば、宗教は常に比喩や象徴、寓話を用いて人の精神に近づこうとし、想像力を理性の及ばないところに高めようとするからである。例えばカトリック教会は祭式や呪文、偶像を用いて人々の想像力を強め、信心を高めようとする。ベイコンはこれを批判する一方で、自らの神話解釈には自由に想像力を用いる。こうした矛盾は彼の認識論によって説明される。人間の精神において想像力は理性に勝って支配的になり得るという認識論的な位置づけが確立されていたからこそ、ベイコンは神話解釈を介して自らの理念の神化を行うことができたのではなかろうか。ある寓意を神と人の間にあるものとして読み込むという解釈の自由は、人間の精神において支配的な想像力に委ねられ、それが理念の神化あるいは宗教化を可能にしたのだと考えられる。

ジャンセニウスの「純粋本性の状態」概念批判

林　伸一郎

本発表は、ジャンセニウスがその主著『アウグスティヌス』第二巻で批判することになる、一六世紀スコラ神学において結

NII-Electronic Library Service